

林鷺峰と新井白石

宮崎道生

目次

一 木下順庵を通じての白石の鷺峰認識

二 鷺峰の著作の白石啓発

三 鷺峰と白石——事蹟及び史学の比較

七すば

一 木下順庵を通じての白石の鷺峰認識

白石が木下順庵に師事することになったのは、

壮年三十才の時のことで、しかも友人、対馬の儒主阿比留^{アビヰ}一西山順素のすすめによつたものであつた。その際、順庵が白石に囑目したのは、白石の著作^{ソウ}山形紀行^{キョウ}一篇の存在によることであり、西山を介してこれを見得たことが両者を結ぶつける縁となつたのであるが、かういふ事情からして順

庵は白石を門人扱ひにはしなかつたらしく、白石自身の言葉をかりるならは、「されば彼門に年久しき高弟も多かれど、我をば常に其座の上にのかしめられし状態であつたへ折たく^{アサ}柴の記^キ」。順庵の白石尊重、また白石信頼の深さは日常にもあらはれてゐたやうであるが、その死に臨み、葬儀等の事を白石と榊原玄輔の兩人に托する旨、遺言した事実によつても窺知せられるところである。

人も知るごとく木下順庵は、林羅山や山崎闇斎、或は中江藤樹や能沢蕃山、さらには伊藤仁斎等のやうに、独創的な學問体系を樹立するといふことはなかつたが、博學洽聞と德行とを以て學界において推尊された人物であり、文字通り君子儒といふべき人物であつた。いづれかといへば順庵は、

徳行の故に令名を得たわけであるが、その學術もまたすぐれてゐたことは勿論であつて——それ故にこの後年迎へられて幕府の儒官となつた——例へば、「非熟讀十三經注疏、則不可謂通經矣」を常言としたと云へられることによつてもそれは察せられるところであり、したがつて原念齋は、所謂古學亦を生焉と稱祖し（『先哲叢談』卷三）と評面したほどである（但し、此の評面には疑問がある）。また、詩文においても謝祭頭面をあらはしてゐたことは、灰主祖傳の批評（『錦里先生書出而持衆之請皆唐突』）および服部蘭部（蘭部）の批評（『錦里先生集』文運之嚆矢、題其詩下甚工首唱唐）（『先哲叢談』卷三）に徴して明らかであらう。だから、東條の礼を執るにも及ばでしき（『師弟』）はなつたとはいへ、白石は腹庵の學塾にうたれて來せこれに師事するに至つたのであつて、さういふ態度の所産として今日伝はるものに『退私録』があり、また『白石神書』へその一部がある。

いま、この二著——『退私録』・『白石神書』において、当面の問題である林鷺峰に関する記事を求めるな

らば、いくらかのそれを発見し得る。論述の都合上、白石神書の記事の方から始める。それは左のときものである。へもと一ヶ條、かりに三段に分けてかかふる。また便宜で註点を加へる。）

（一）松平伊豆守信綱平生の言に、儒者の中様に、國の政、勢はなりぬれぬ、故に之を中事を評議して、却て政事の弊に改まし、之を甲されし程に、私文院學士等、當時にておのづからもてはやすと云ふを、津和野外に居宅ありしに、某も訪至りしに、門外に事問ふ人もなかりき。されど、其時にも津和野守は逆鑑など讀じて聞れ、意直に告ぐ。此時分の事、俗眼より見る時は下等なる者なれど、林學士の博學、固は此時の附會の中に得られたるなれば、事のやうといふべし。（『退私録』）

（二）其後、退私録集題語にはよく補せられければ、ある前にて津和野守の座に林學士の伴食せられし際に、其の、津和野守として再行したと申されしに、津和野の林學士に向ひて、大抵津和野は式々とも清和院様と

こそ申せ、殿と申さるゝ條如何有べき、と有しに、學士云、様と申は俗稱也、殿と申こそ尊榮の稱にて候へ、京都の公方家をも鹿苑院殿の、慈照院殿の、なども中上れば、清泰院殿と申す何かくるしかるべき、と有しに、雅樂頭曰く、此むかし伊豆守の中されし事有き、只今思ひあたり侍る、と申されて氣色宜しからざる故に、晏客、學士を退出せられて可然由にて、其座を立しめられき。

(三) 其後に餅^{「菓子」}はしの出し時に、晏客、雅樂頭殿へ申されて曰、春齋次の間に伺候しぬ、御前へ参りて伴食候やうに申べきやいなや、と有しに、それ〴〵と在しかば、學士又座に就きて餅引寄ていたくるにした、か喰れしと云物語有。雅樂頭殿の此時の詞の末にも、豆州には儒を疾み申されしといふ事符合せり、されど智計の光りにて、当世の人其材略に恐れてこそ蒙服せし事とは覺えし、と宣ふ。^{（暗し）}

(白石全集才五、六五五—六頁)

次に、退私録(附言)の記事は左の通りである。

(便宜、句読点を加える)

○史記は實録也、通鑑は存心もの也。(中略)本朝の武士、其々の自叙傳り、明り引合て見れば事略、其の外の海背あり。それは即、実なり。もし、それを其の近き方へかたうけて優劣を定たりば、其子に及々、中々合点することにては難し。正徳、寶永の事、その子孫、林、雪村の記し(雪村は、本朝)をよめし事(中略)しか也。正徳、寶永の事、其の三人法師の草紙に見へたり。降参にてはなし、合盟して和したる也。加賀を頼之が遣はしは頼之が單の風也。(中略)今も本朝通鑑の世に出でたらばむづかしいと給ふ。(史記、漢書、白史全集才五、六一五—六頁)

○浅井記、本下、上へ物語候一冊、伊賀守かり

(永井尚庵)

て永信うつしけり。又、三乳世に出る全部十二三冊、加州へ讀へられ、通鑑の時習ぬきて被遣、其後旅行。(浅井記の事、白石全集才五、六一六頁)

管見のおよぶところ、以上が麓峰についての順庵の物語の筆記であるが、僅かながらこれらの記事

によつても、順庵を通じての白石の鷲峰認識が重大な点にふれてゐることを知り得る。即ち、鷲峰が世事にうとく人間として洗練されてゐないところはあるが、材略があり、學者としての識見と深い学殖とをもつてゐたこと、および鷲峰の責任編輯に成る本朝通鑑の記載には妥當を欠く部分のあること、などそれぞれである。而して、鷲峰の博學廣聞が閑居の生活の向にえられたものであると語つたことは、白石に対して少なからず教育的効果をもつたものと推測されるべくこれは、白石自から塾居浪人の生活の向に或程度実行すみのことでもあつたが、白石がわざ／＼これを書きこめておいたことに注意を要しやう。

因みに、順庵は鷲峰と親しい同柄だったので、前掲神書にも「神田門外に居室ありしに、某も訪至りしに」と見えるが（オ）一段のうろ／＼、鷲峰の因史館日録を見ると、順庵の東訪談の記事が再三見えてをり、また鷲峰が前田邸をたづねた際、順庵と談じたこともなども記されてゐる（エ）。また、兩人の交遊を物語るものとして、元禄元年十

一月、將軍綱吉が湯島の大成殿に詣でた時の感想を賦したと言律一首を鷲峰に呈した事実がある（3）。かういふ風に、確かに鷲峰その人を見、またその学向的事業へ本朝通鑑の編纂その他／＼を自撃してゐた順庵のことであるから、白石が鷲峰につき順庵からききえたところは、上掲のもののほか、なほ少くなかつたものと思ふが、その結果としての白石の鷲峰評価は——鷲峰文集などを直接閱讀したのであらうことも併と——かなり高いものであらうと認めることができるのはあるまいか。

二 鷲峰の著作の白石啓発

前節の終りに挙げた鷲峰文集は、元禄二年に上梓されたから、白石がこれを読んだであらうことは疑ひないが、明かに読み且つ大いに利用したものととして日本王代一覽がある。本書は、鷲峰自身の跋文によつて、慶安五年（4）へ鷲峰の自撰年譜は、これを慶安三年にかけてゐる（4）小浜藩主酒井忠勝の求めに応じて撰述したものであることが知られる。而して、取扱つた時代の範囲は神武天皇から

正親町天皇に至るまで、全と帖から成る。周知の通り本書は、簡潔な政治史であり、しかも隨所に批判論評が加へられてゐるから、大いに學界で歡迎されたやうであるが、寛文三年に刊行されたが、その後版を重ねてゐる、内容的に見て、これにつづく本朝通鑑の基礎的著作と見なすべきものでもあるから、白石の本書利用も、さういふ判定の下になされたのではないかと思ふ。

白石の著述中において、王代一覽利用の跡が鮮明であるのは、主著の一つに数へられる讀史餘論である。両者の關係の深密さについては、別稿で詳述したので、ここでは若論だけを申し述べるに止めるが、餘論において、(1)一覽の名を明示して引張した箇所は六ヶ所、(2)一覽の名は挙げないが「一説に」といふ説あり、などの表現の下に明かにこれを用いたと認められるもの二十餘ヶ所、(3)何等のことわりをなしに一覽の文を採つて地の文としたと認められる箇所に至つては枚挙に遑水ない(後へ方によって異なるが、百以上に上る)。試みに、王代の一覽にのこる一劃のみを挙げて

左のこくである。

(1)類一後三年の役の條

おもふにこれも武則、武貞が子弟たるべし。王代一覽に武衡は家衡兄のよし見ゆ。いかなる處にの覺束なし。(一説一八頁)

(2)類一藤原時平の謠言

一覽「天皇ノ弟ヲ各世親王ト云。菅丞相ノ婿ナリ。故ニサキニ空多ノ謫位ヲ、サヘトベメラレケルハ。吾世ヲ太子ニ立ントノタタミナリト。時平奏聞也ラレケルトナン。」(刊本才三ノナヒ丁表)

餘論「一説延慶の弟吉世親王は公の婿なれば、此人をたてんどの事かりと疑はしともいふ。」(文庫本)

(3)類一安徳天皇と平清盛

一覽「安徳天皇 高倉院ノ子。諱ハ言仁。母ハ建礼門院平徳子。太政入道清盛が娘ナリ。治承二年十一月誕生。同四年二月。高倉院ノ譲リヲウケ。三歳ニテ即位清盛夫婦准三宮ノ宣旨ヲ蒙ル。関白基通攝政。後白河法

皇ハ鳥羽殿ニ蟄居シ。高倉上皇ハ。新院ト申レトモ。政務ヲイロヒタマハス。攝政モ名バカリニテ。天下ノコト。大小トナク。

皆清盛がマヘナリ(刊本才四三四下表)

餘論、安德は高倉の子、母は清盛が女、建礼門院といふ。三歳にて受禪、清盛夫婦准三右の宣旨を蒙る。關白基通攝政たり。法皇は鳥羽殿にとらはれ、高倉上皇は新院と申也しかど、政務をいふに給はず、攝政も名のみにて、天下の事ことごとく清盛が心のまへ也。(文庫本六の頁)

叙上王一代一覽のやうに決定的な明証とすべきものは殆んど見出さないが、同じく読史餘論の参考書の一つとなつたものではないかと臆測されるものに下朝通鑑がある。いふまでもなく本朝通鑑は、前編、正編、統編の三つを主部とし、ほかに提要、附録、凡例并に引用書目録があるが、この中、正編は旧本朝編年録一羅山模のみを別として、他はことごとく鳥峰主宰指導のもとに成つたものであるから、就していはば通鑑の利用は即ち鳥峰

の史学の攝取と認めてよいことにならう。そこでいま餘論について通鑑利用を思はざる箇所を求めると、次の如きものがある。

○餘論一北條義時の死

承久の乱後、二年をへたて、元仁元年、六月十三日、義時死。東鑑に、曰比脚気の上霍乱にて殊々危重なりしかば、若君に申して今朝寅時に出家して死す。昨朝より殊陀を唱て息らず、外縛の印を結び、念佛十遍の後に終る。順次往生といふべし。保曆問記には、近習の小侍のために刺殺されしと見ゆ。一説に、近侍に深見三郎といふものあり、はじめ彼が父教簡所の地頭たりしに、罪ありてころさる。其三人の子は流されき。年経て赦されて、長子三郎近侍となる。父の罪をも贖ひ、又弟をも召仕はれん事を思ひて、夙夜する事五年に及しかど、一所をも賜はず、又弟をも赦さざりしかば、恨みて、其病に乗じて刺しけるを、亘理平太といふもの七十餘歳なるが、侍にありて推隔しかどかなはず、義時は判れぬ。深

見をば直理う方けりともいふ。(文庫本、一六〇一—一六

○通鑑

一説曰、義時近侍。有環見三部。其父嘗為教
部之宰。好色極。以淫染屬黨。欲害屬常。
故私斂公稅。家累千金。義時聞之。糾其罪而
誅之。放流其三子。三部者其長也。歷年赦之。
奉三部為近侍。三部欲贖父罪。乞差赦而仕義
時太勤。日夜侍之不怠。如此五年。然義時不
與一邑。初謂其弟而未果。三部恨之。及義
時疾。竟其謀刺之。以報報讐。直理平太年七
十時。在傍欲隔之。而不能。三部遂弑義時。
直理退還三部。北條氏惡之。称疾卒云。(以下
註)保元朝記亦曰。義時為近習者。被刺殺。
人以高天討。今考果鑑。義時頃日病脚氣。六
月十二日霍亂。十三日刺殺。遂死。於其文義
無所可疑之。蓋好事者。作為此異說乎。(侍
君)

因みに、この事件の記述に關しては餘論と一覽
とは無關係であるので(一覽の方は簡略)、参考

までに一覽中の同事件關係の記事を左にかかげよ
う。

「大月十三日。北條義時病死。歲六十二。或説
二ハ。頓死トモ云。又異説二ハ。近習ノワカキ
者ニ突殺サレタリトモ云リ。(刊本オ五)
この他、なほ關係あるらしきものが二三認められ
るが、いまは省略する。少くとも、後年幕府に入
り、將軍の侍講として楓山文庫の藏書及び將軍座
右の書を利用しえたと思はれる白石のことである
から、本朝通鑑を見る機会もありえたと推測する
ことは失当ではあるまい。」

これも臆測の部類に属するものであるが、読史
餘論にあらはれた變の觀念の先蹤の一つと見るべ
きものが、同じく本朝通鑑條例および同書凡例附
録中に見えるから、左にかかげよう。

(イ)本朝通鑑條例才大

延喜以來至後冷泉帝則國政多是出自藤氏。自
後三條帝至近衛帝則多是太政皇之政也。保元
以後政權移於武家。此是國家之變。操筆者不
可不知焉。

(四)同上書凡例才九

安和以來至治曆。国政多是出自藤氏。延久至父寺。多是上皇之政也。保元以後政權移於武家。此是時勢之變。(下略)

(イ)同上書附錄才二、皇運部

竊聞堯周之興。有任劔之助。劉漢之衰。有王莽之篡。然則皇家之外戚。不可不擇焉。文德崩。而清和幼弱。良房以外戚之權攝政。任太政大臣。(中略)基經者。而之兄也。……故藤原氏立元壽之柄在其手。関白之号始於此。(中略)延及宇多。當此時。菅丞相起自微賤。……遂拜三公。……然菅公不悟。果有宰府之

謫。嗚呼命也。時宇多獨尊。民與墮焉。天子幼冲恭己。上皇唯念佛蓮變。藤氏之威權。過於王室。(中略)延喜以來。優歌之風日盛。而文学日衰矣。王室漸弱。而攝家弥強矣。可謂本朝之一變也。

(イ)は寛文四年十一月一日に草せられたもの、これによつて通鑑の編修方針が定まつたのであるが、完成の後凡例として附せられる際に多少改められ

(四)のやうになつたものと推察される。これらが白石の九変觀と同種同様の視方であることは、一々の例証をまた下して明かであらう。(イ)は、餘論の才一、才二變の論のすめ方と甚だしく似た感じがする。

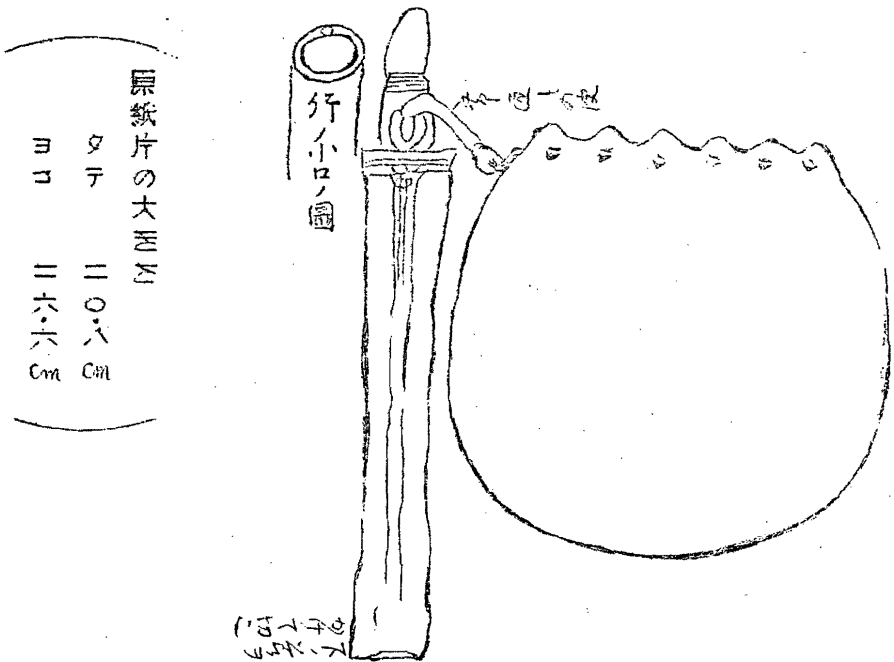
以上挙げたところは、史学上における鶯峰と白石との関繋であるが、序に音楽方面における兩人のつながりを示す資料を一つ紹介したい。これは未だ一般に知られてゐないものであるが、白石自写と伝へられる律呂新書諺解である。これが鶯峰の著書であることは、巻首の署名「向陽林子」と巻末鶯峰の跋文に徴して疑ひないと思ふ。後者の跋文は、

律呂者、数学之要也、志於儒者不可不解也、余性拙於算數、故講虞曲也、見孟子也、按漢書、韋恩漸解之、然稽卷則不得曉記、是以往年一夕使門人佐慶松蔡代新書、算律呂之數、待史安成在側單之、勒爲小冊、雖氣亮明之新得、於生實損益聲變等法、聊有便指乎、未遑詳書、偶失草本、每按律呂之事、借之不口、經十餘年不敢忘

焉、頃聞佐慶也嘗讀草字之、乃問有之則曰有之、即曰借之、使島岡寫之、下曰而成、不亦幸乎、嗚呼其失之也、不似楚人遺^(一字)之意、其得之也、可比合浦還珠之喜乎、乃記其趣、以爲妄許惜書之戒、丁巳之臘末、鷺峰變跋^(返点筆者)といふものであるが、その末尾に「丁巳之臘末鷺峰變跋」とあるによつて、本書の遷述は延宝五年（鷺峰六十才）のことではないかと推考する。内容は、左の通り九項目から成つてゐる。

- 黄鐘才一 黄鐘之実才二 黄鐘生十一律
- 才三 十二律之実才四 变律才五 律
- 生五聲図才六 变聲才七 八十四聲図才八
- 六十調図才九

該字本は、現在表装されて折本となつてをり、末尾に蘭馨岡崎桂一郎氏の識語「右新井白石先生自筆時寿本之一也雲室永井先生」があるが、果してこれが白石の自写にかゝるものかどうかは俄かに断定しがたい。墨見では、かりにこれが白石の自写本ではないにしても、筆蹟は白石に酷似してゐる。白石の手許にあつたことだけは疑ひえない。



ところで、もし自筆でないとするは、おそらくはその側近者に写されたものであらう。これが少くとも白石の所蔵にかかるものであつたと思はれる証拠は、この中に挿入された一枚の紙片の存在で、いまその原形を如実にここに示しえないのを遺憾とするが、まぎれもなく白石の筆蹟であると私は判断する（模写図、参照）。この筆蹟がいつ行なはれたものであるかは不明であるが、白石の音楽研究が最も真鋭になされたと思はれるのは、朝鮮使節應待の準備をしてゐた宝永七年、正徳元年（十月以前）であるから、この時期は候補の一つとしてあげられやう。現存する白石の音楽関係の著作抄写本には、樂考、樂対、樂目錄、坐回單語（別名「親樂筆談」、休庵抄（豊原統秋著）その他があるが、右の律呂新書諺解の書が果してこの程度に白石の音楽研究に裨益するところがあつたかは全く知るよしもない。ただ、本書が白石の自写本か否かは別として、これは白石の驚峰まがえ実証する資料として一つの價值を有するものといへよう。

三 驚峰と白石——事蹟及び史學の比較

白石は青年時代から林家に対して好感を抱いてはゐなかつたし、甲府家に出仕する際には就職問題（大名家関係）に対する林家の圧力を現実（に）感じして一層不快の念をもつに至つたが、將軍家宣の寵遇をえるに及び、林信篤と対立する状態におかれるや、憎惡の感情にまで發展したことは、拵た。紫の記に徴して明瞭である。しかしながら、前節見た所からも察せられる通り、學者としての驚峰に対しては——その父羅山に対してと同様であつたと思ふが——白石は敬意を表してゐたやうであるし、また実際に學問を蒙つてゐたのであるが、この兩學者を比較した場合、事蹟においても學問上、とくに史學方面でも、多くの類似点のあることが認められるから、紙幅の許す範圍内において、以下兩頭學の比較を試みようと思ふ。

まづ事蹟の方から見ると、オーに向題となるのは幕府との関係であらう。兩人とも幕府に仕へ、幕政に参与し、將軍家乃至は幕府重臣の左めに書

を講じ文を授し、もしくは書物の編纂を行なつたことかそれである。幕政への参与といへば、内政外交の両方面にわたるが、内政においては武家諸法度の制定に關係し、訴訟問題の裁決にあづかつたことなど、外交面では、主として對朝鮮關係であるが、返簡を起草したり應接の事務にたづさはつたりしたことなどにおいて、當時、白石の向には共通した姿が見られる。寛永十一年、十七才の時、父に従つて江戸に移り住んでから、いはば助手的立場で父羅山の仕事をたすけたから、幕府政治との繋りは長いが、幕府から年俸二百俵を給せられるやうになつたのは正保元年、二十才の時のこと、これを白石に比べると、白石の場合のよく制度政策の立案企画を行ない、それが実施に移されるやうなことはなかつたのであるから、幕政への参与の度合は浅かつたと見てよいであらう。外交面についていへば、寛永が、幕府に対し鄭成功の援兵要請が行なはれた際へ正保四年、書面の取扱、重臣間の連絡など事務的方面にすぎなかつたものの、その向題の處理にあ

づかつたことのあるのは、白石と異なる点である。これに対して白石には、對清貿易問題に關係して、新方針を建議したりしてゐることなどがある。因みに、對朝鮮關係において、彼使節と筆談したりもしくは詩の唱和を行なつたりしたことなどのある点では、兩人は共通してゐる。なほ、直接的ではないが、内政面において兩人の接觸の認められるものがある。それは即ち、武家諸法度中、乗輿の規定で、それに關する兩者見解の相違は、それされ法度の規定上にあはれて來てゐる。考察の便宜上、これに關係のある武家諸法度の條文を挙げると、

工寛文令才十一條

乗輿者、一内之歷々、国主、城主、一万石以上并国大名之息、城主暨侍從以上之嫡子或年五十以上或医陰之両道、病人免之、其外禁濫吹、但免許之輩者各別也、各別也、至于諸家中者、於其國撰其人、可載之事

正天和令才十一條

乗輿は、一門之歷々、国主、城主、一万石以

上并国大名之息、城主臣侍従以上之嫡子或は
年五拾以上許之、儒医諸出家は制外之事

Ⅲ 宝永令第十三條

乗輿の制、凡万石以上より、国主の嫡子庶子、
城主并侍従以上の嫡子に至り、其餘年五拾以
上の輩の外、みだりにこれを知るさへる事

附、医、师僧家は制外之事

等となるが、傍点を施したところを見て明かなや
うに、三法度の向には順次変化がある。もとく
乗輿の規定は元和の武家諸法度中にあり、それに
おいては国大名以下一門の歴々は免許を要せず、
昵近之衆、医、陰両道、六十以上の人、病人は免許
を受けることとし、公家、門跡、諸出家を制外と
したが、ついで寛永六年には国大名の子息、城主、
五万石以上、五十以上の人、医、陰両道及び病人を
免許を要しない今に加へ、他は免許を要すること
としており、さらに寛永十二年には、大名の部類
において一万石以上、城主臣代侍従以上を加へた。
而して上掲の規定に見えるやうに、寛文三年には、
従来あつた「公家、門跡、諸出世之衆制外之事」

の文字を除かれ、天和三年には医、陰両道及び病人
を除いて、儒医諸出家を制外とし、また宝永七年
には、一門の歴々、国主、城主の文字を除いたほ
か、制外中儒を除いて医、师僧家としたのである。
いま、この乗輿の規定において鷲峰、白石両人の
向につながりがあるといふのは、寛文令制定の時、
医、陰を儒医に改めたいとした、鷲峰の意見が、水戸
光圀の反対で却下されたのち、天和令において制
外ではあるが儒医と並記されるに至り、鷲峰の意
見を生かされたにも拘らず、宝永令に至つては、
白石の意見によりまたも儒が省かれて、医、师僧
家が同列におかれることとなつた点がある。鷲峰
が医、陰を儒医に改めたいと申し出た理由は、

「当時、陰陽師乗輿の者、京都の他にハ有へか
らず、武家法度の條數、陰陽師なくとも妨なし、
儒の字を加へられハ此道の志の者の勵成へし」
(林氏異見——法修之事、改定史稿集覽十
と、二六五頁)

といふにあつたが、たま／＼これを知つた光圀が
老中にむかひ、「儒ハ讀書の者に限るへからず、
我等こゝきも儒也、何ぞ儒と並て両道と云へき、

儒医両道と有てハ末代の嘯りたるへし」(同上書)といつて反對したため、元のままとなつたらしい。天和令は、葛峰の子信篤と人望を元との兩人によつて起草された関係で、葛峰の老體通り儒医の並記が実現したものであらうが、それが再び白石の手によつて変更され、儒医と並びはなされたのは、白石自身それに説明を加へたものではないけれども白石の執筆した新令司附にも見えない、書ぞろろは毛図と同じ考によつたものであらう。而して、二々にあらはれた林家と白石との間の儒者観の相違は、注意すべきものに思ふ。

次に、將軍ないしは幕府重臣のための講書、撰文、編書等であるが、この点では兩人とも卒殖が深かつただけに、その貢献は大きかつた。先づ葛峰は、江戸に移り住んでから数年の後には父の助手として役立つやうになつたらしく、自撰年譜によると、父の命により寛永十一年(二十三才)から同二十年にかけて寛永系図の編纂にたづさはつたのをはじめこの同十九年には武論一篇をつくつてゐるが、餘程すべれたものであらうと見

え文羅山はこれに救贖し、且つこれに方なんぞ自らもと武論を尊してゐる(註)、正保元年(二十ト才)には、同じく幕命にもとづく本朝神代帝系譜図、録意將軍家譜、京都將軍家譜、織田信長譜、豊臣秀吉譜等の撰述に協力してゐり、また本朝通鑑正統の前身一本朝編年録の撰修をも助けたのである。これらによつても、若年ながら葛峰の実力が格段のものであつたことが察知されるが、その後父の助手としてではなく独立に撰述上望したものに、日本百將伝抄(元禄元年)、異朝百將本朝三十六將小伝(寛文元年)の撰述があるが、羅山亡き後の仕事として大善本朝通鑑のあることいふまでもない。その他、永年にわたり幕府重臣のために五経その他和漢の書論語、大学、中庸、孫子、藏板抄等々を講じたことがあり、その功により寛文三年、弘文院學士の称号を授けられたことも著名である。勿論、この後も諸書を講じ、經史両方面の寄物を撰してゐる。

これに対して白石のすは、家宣がまだ藩邸にあつて甲府割置を急來つた時代から、その薨去に至

るまで、主として儒教の經典―經史の緒言を進講し、詩經集伝、書經集伝、周礼、孝經、四書、春秋左氏伝、通鑑綱目正編總編等々、而して綱目統編の副進講として讀史餘論がある、また政治向きの事以外でも、家宣のために石、柳、藤を起草し（宝永六年）、大・成・殿・御・詔・次・才を送し（同と年）、つづく二代將軍家宣のために御元服次才を撰進したりしてあり、また家宣のための編輯習に至つては（將軍就任以前のものをも含む）、実に多数に上つてゐること周知の通りである。いま主なものを取れば、詩經圖、歷代卷圖、藩翰譜、古史通并武向（初稿）等（以上甲府侯時代）、略御系圖、新田考、將下考、長寺古文書考、同文通考等（將軍世子時代）、宣皇考、太政大臣考、東部將軍任次考、祭社考、樂考、國郡名考、本朝古今沿革餘論へ註、讀史餘論の抄本等々がある。

他方、學問上、とくに史學上において兩人を比較すると、これまた差違が少なからず見出される。尤もに史觀において、兩人とも儒教であり、朱

子學系に屬する學者であつたから、儒教的合理主義の立場に立つ、大義名分論に立脚してゐること、また右に見え通り、兩人とも幕府に仕へたことから佐幕主義に傾いてゐたことが挙げられよう。尤も二に方法上において、兩人とも廣く文獻を渉獵し、正史實錄のほかには伝承ノ稗史小説の類にも注意を拂ひ、これを利用する態度をとり、また外国の史書實錄をも尊重して、彼我の史料に基づき比較考察を行なふ試みをやつたことがあつた。さらに、兩人とも考証につとめ、かつそれに長じてゐたことをも挙げなくてはなるまい。尤も三は業績上の類似で、これを時代順に舉る時には、本朝通鑑前編と古史通并武向、通鑑統編と讀史餘論、寛永系圖と藩翰譜とは、それぞれ対応する作品と見ることでさうである。これらの諸点については、他日改めて論述するつもりであるので、ここでは詳論をさけるが、史觀及び方法上の差異について一言するならば、夢峰が父眉山の態度を承けて司馬光の資治通鑑の史法になつたのに対し、白石は水戸史學と同様、朱子の通鑑綱目の史法を範としたから（白

石は青年時代から通鑑編目を熟讀し、これに精通してゐたし、石令史觀の徹底といふ点では白石の方を越え、これはない。また合理主義の点でも、本朝通鑑前編と古史通とを比較すれば判るやうに、白石の方がそれを進めてゐたといへるであらう。方法上においても、白石は國語學に長じ、素朴ながら漢學的民俗學的知見をも育してゐたから、全般的に見て國史の考察においては、白石の方に餘味があつたといへるのではあるまいか。さうに學者として親た場合にも、両者の間には共通性がある。翫遊態度が著明であり、精密であつた氣は上述の諸業績を通じて見て明かであるが、學者としての矜持と謙遜とにおいても兩人には共通性が認められるのである。矜持と氣骨とは表裏一体の關係にあると思ふが、鶴峰の場合、さきに引いた白石神書^{（一）}の文によつても、權勢者を前にして憚るところもなく所信を述べる態度水肥^{（二）}られるが、同様の態度は本朝通鑑の編纂に際しても現はれた。即ち、同書の編修方針につき城中においてせ中^{（三）}のから相談があつた時、老中らの議定した編修員の

数が鶴峰の希望した人数の半ばにも満たなかつたので、卒直にその不満をぶちまけたが、その際座にありた人々は鶴峰の意氣の軒昂たるに驚かされたといふことである。坪井玄馬三博士もいはれたやうに、鶴峰の生活態度は趣味であり、諸大名との交際もあまり好まず、學問に精力を傾注してゐたので、學問の精密度においては父羅山を越えるものがあつたと思はれるのである。二代目なるが故に、父羅山の名聲の蔭にかくれてその眞價がおぼはれがちであるが（一般に儒學史においては羅山が詳述されて、鶴峰は簡略に取扱はれる傾き水ある）、學問上の素力は父に優るとも劣らぬものであつたと思はれ、その事情は後の伊藤仁斎とその子東涯との關係と同一態であるを感ぜしめる。鶴峰の學者としての信念を端的に示すものは、先哲叢談に引かれた次の言葉であらう。

「武人執兵而殺。初死建功。學者讀書立言。為隱性命。固其所望也。」（卷一）

これによつて鶴峰の學問は、生命を賭ける底のものであつたことが知られる。かういふ信念と生活

態度であつたから、前述の白石紳書にも見られるやうに、政治家の方からは嫌はれ極遠されたわけであるが、しかしその意見は無視できなかつたから、或る期向に限られはしたけれども、執政者から意見をきかれ幕政に参与することになつたものであらう。

學者としての白石については、先学の驥尾に附して私自身もすでにしばしば見聞を申し述べたことであるから、重複をさけるが、論述の都合上一二を挙げるならば、その矜持と氣骨が最も鮮明にあはれたのは、家宣の前身、甲府綱豊が將軍の世子として西城に迎へられた時、同僚へ柴崎正勝・村田又辰が引つづいての仕立を望んで周旋奔走につとめたにも拘らず、白石は出仕出願を差控へて、靜かに成行を見まもつたのであつて、その時の心境は日記に詳記されてゐるが、その一節はかうつづられてゐる。

「オ三にハ、某經術を以て仕ふ所也、上もし經術を貴み聖道を仰かば給ふ時は、捨さば給ふ事なかるべし、もし聖道に御志すまじ、年來の御

經學を廢さば給ふ時ハ、たとへ万鐘の祿を得るゝも身の益なきもの也、聖道を仰かば給ふ事、經術に御心をますゝ、加へられん事等は、之なたよりすゝめ申す事のかなる所にあらず、あなたの御心にある所也、之をたよりしめて御奉公を願申さん事、寸を枉て尺を信るとも、某か本志にあらず、」(新井白石日記 上、二三五頁)

鷹峰が幕府の重臣から敬遠された以上に、白石がおそれられ嫌はれた事は、周知のことである。家宣の信頼と側用人・岡部詮房の支持とがあつたればこそ、白石の意見建議が或は容れられ、或は活かされることにもなつたのであるが、その家宣さへも、白石を以て父のそとに存在としてゐるをほそごある。青年の日、白石は師を棄てよとすすめた友人にむかつて、死を致して仕ふべきは君と父と師であるといつたが、その宣言の通り初めは父と師とに、父亡き後には師・順庵と主君・家宣とに、師の順庵亡き後には主君・家宣に死を以て仕へた。而して、上掲の述懐によつても知られる通り、その家宣への致死奉公は聖道・聖學を媒介とするもの

であつた。即ち、白石の學問―聖學は、鷲峰の場合と同じく生命をかけたものであつたと認められやう。藩翰譜の編述に當つては、「凡其中国家事を抛却、舊衣二彩精神、自製滿頭、百年の精力此時ニ半ヲ盡しぬ」(日記元禄十五年三月十九日條)と嘆じたほどであり、また家室への建議起草及代進講の準備の為の肉體酷使は、遂に白石を病弱に陥れ、「四危に各する事万壯に餘しつたがその効験はなかつた(折たく柴の記)」。

もし、面学者の心構において差異点を求める場合は、鷲峰が名利に恬淡であつて、學者―學者と白石の方は夙に天下有用の學を志向して經世の才をみずき、あはよくは封侯となつて國政をきりもりしようと思ふたことであるから―學者的素質に惹まれ業績の上でも學者たるの眞價を發揮したことはいふまでもないけれども―、鷲峰との向には一線が引れなくてはならないであらう。

むすび

以上、三節にわたつて鷲峰と白石との繋りを明らかにし、事蹟及び學問上の比較をも試みたが、両碩學はその生きた時代を異にする岡保上へ鷲峰元和四年―延宝八年、白石明暦三―享保十年)、少なからず相違点の認められるのはむしろ當然で、したがつて個人的境遇とあはれて、兩人はそれぞれ時代背景のもとに觀察されなくてはならないことになる。白石の生れた明暦三年は、羅山の歿した年であり、時に鷲峰は四十才を算へた。鷲峰は元和偃武の直後に生れ、寛永十六年その二十二年の時に鎖国体制は全く備はり、徳川政権の基礎は固まつて国内情勢は安定を見たし、個人的境遇を見ても、父羅山の庇護のもとに順調な仕官生活、研究生活をつづけたやうであるが、白石の場合は――二十才すぎまでは鷲峰と同時代を生きたことになるが――表面の政情安定にも拘らず、すでに時代は動いて幕府をはじめ諸大名の財政は破綻を来し、幕藩制の基底をなす農村は疲弊の兆を示し始め、对外贸易も輸入超過の傾向をつづけるといふ風で、その壯年時代(元禄期)には困難な政治

經濟問題がもはや陰蔽糊塗を許さない状況に立至つてゐた。而して、この時代の変転は、儒者の社会的地位と役割とを大きく改訂する主因であつた。

江戸初期における儒者は、僧侶の隸屬下もしくは下風に立ち（さき）に乘輿の問題に關して引用した林氏異見によつても、当時儒者独立した存在と認められてゐなかつた状況を知り得るであらう。

羅山にしても、鰲峰にしても、趙葵し僧位僧官を受け、名も道春・春齋と称したこと——このため羅山は山崎闇斎及び中江藤樹からはけしい非難をうけたことは著名（せうめい）（世儒劉髮余、林子剃髮受位余）——は周知の事実であるが、これが綱吉の代になり元禄に入るや、鰲峰の子鳳岡信篤は還俗蓄髮を命ぜられて大學頭に任ぜられることとなり、ここに儒者が社会的に独立した存在であることが証明され、その權威が認められるに至つたのである。

勿論これ以前においても、藤原惺窩門下諸大名に仕へ、また熊沢蕃山のやつに、池田光政の信任のもと一時藩政を掌りたりして時人を矚目させた事例もあるが、幕藩体制が動搖を来し始めた元禄

期に至つて、やうやく儒者が經世済民の體現者として本来の使命を果すべきつかげが乏られ、やがて白石や徂徠、鳩巢等が政治觀向的立場において深く幕政に参与する道が開かれた、と見ることも出来るのである。かく、中世以来將軍や大名の政治觀向としての地位を維持してきた僧侶は、江戸中期に至つてはもはや政界から姿を消し、儒者がこれに代るが、しかしながら佛教勢力は政治権力と結びつくことによつて、依然として強い社会的影響力をもちつづけたこといふまでもない。だから、白石の排佛も慎重な態度で行なはれざるを得なかつたのであるが、概していへば、白石の中年以後の時期は、學界思想界においてはもとより政界においても、儒者の発言権が最も強かつたこと否定できないところであり、その点では白石は鰲峰より愈まれてゐたといへるであらう。個人的に見れば、二代目で苦勞知らずの鰲峰と違つて、白石は痛切に生活の苦難をなめたから、人間社会の、したがつて歴史の觀察において一層弾力性をもつたものと思ふのであるが、大きく見て時代

環境が上述のごとく、儒者・学究者にとつて有利な條件をそなへてゐたことを見るが、すくなくとも出来ないのであらう。へ但し、個人的に見た場合、鷲峰は少年時代に漢学を那波活所に、和学を松永貞徳にうけ、いはば正規の学問をしたのに対し、白石の場合は自からもいふごとく、壮年に至るまで師につくことがなかつたので、この点は白石にとつて不利な條件であつたといへやう。―― 少くとも文運の進展向上といふ條件だけでも、壮年期以後の白石には学問上の利便が多かつたわけで、これを林家との関係に限定して見ても、羅山文集や鷲峰文集、または王代一覽等々をよむことによつて、多大の啓発を受けえたこと疑ひないところであるから、本稿における鷲峰・白石の比較も優劣のあけつらひをさけて行なつたわけであるが、もし両者の後代への影響方の大きさを向題とするならば、やはり白石の方を推すべきではあるからうか。

本稿の目的は、一般には知られてゐない鷲峰と白石との繋りを明かにすることにあるが、調査の不足と紙幅の関係から実証に徹しえなかつたこと

を遺憾とする。ただ、白石との比較を試みることで、よつて私自身、従来ご方らかといへば過小評価されがちな鷲峰の学究者としての姿を不完全ながら知りえたことは望外の收穫であつた。坪井博士の跡にならつて、私も他日、国史館日録を精読して見ようと思つてゐる。

(註)

①この「同日」、すなはち二月十一日といふ日付が何時のことか判定しがたいが、白石が順庵の門に入つた貞享三年から、甲府家に出仕した元禄六年十二月初までの間のことであるといへよう。

②国史館日録——寛文七年十二月十九日、同八年二月九日、同八年四月十三日、同九年十二月十九日の諸條。

③「木下順庵と新井白石」に換る——近世日本の儒学、三八三頁、参照。

全自撰年譜には、「今秋應護岐守求、作中華正代紀略、此後又作日本王代一覽」と見えるが、寛

文三年の刊本に收められた跋文の日付「慶安五年壬辰五月吉日」に従ふべきではなからうか。

⑤本朝編年録の続修、即ち本朝通鑑の編修が問題になり始めた頃へ「寛文四年甲辰。春秋之際。

」における鷲峰と通井忠清との対談の一節に、「忠清笑曰。子之所作王代一覽。大綱略備。且

夫諮詢古今之事。所答如流。自非博識匡代。則不能如此也」とあることなども、両書の關係を

よく示す一資料であらう。

⑥「林家史學と白石史學——王代一覽と読史餘論

」の連繫——、日本歴史誌上に発表の予定。

⑦本朝通鑑では、かゝるに東鑑「吾妻鏡の記事を

信用しているが、読史餘論の方はこれと反対で、

次のやうな批判を加へてゐる。「東鑑に記止し

所遺すべからず。腹次往生の類、皆是文飾のこ

とはたる事明なり。保暦の記さもあるべくや」

（宮波本、一六一頁）

⑧の餘論「帝は近衛前殿下の第に潜幸し云々（岩

波文庫本、二四五頁）に、八行目）通鑑「潜

幸近衛左大臣藤序綱第。」云々（国刊本、オ

十三、四四三の頁、四一六行目）

④餘論「廿二日、夜、国助が宅放火、義就、国助

河内におつた云々（一説に伊賀）（二四七頁）通鑑「

辛丑。洛中不靜。今夜。遊佐国助自燒其宅。

幸義就寺伊賀國。」（オ十三、四四七三頁、

八一九行目）

なほ、他にもあるが省略する。

⑨本朝通鑑（清書本）が楓山文庫に納められたの

は寛文十年六月十二日のことと、国史館日録に

「十二日。……一刻。通鑑二十四函英備 上覽。

午刻。伊賀及土能攻以清書十二函。附庫吏。納

於御文庫。中書十二函留在御前。」（二一五二

八頁）と見える。同記事によつて中書本が將軍

の座右におかれたこと明かである。この清書本

、中書本ともに現在内閣文庫に所蔵されてゐる

こと、周知の通りである。

⑩なほ、鷲峰文集オと十の西風露淚篇には、世

人は皆朝寢の責へたのは清盛に起り、頼朝に成

つたとするが、余は藤原氏がこれをなしたもの

とする、といふ解釈が見えてゐる注目される。

(安井小太郎氏著『日本儒学史』、二七頁)

(11) 二の折本の扉に当る部分の右端には、博望堂「青本信実氏珍藏」の文字が記されてゐる。岡崎桂一郎氏の所藏以前の持主を示すものであらう。いづれにしても元は新井家にあつたものと考へられ、伝束の筋も確かであると思ふ。

(12) 拙著『新井白石の研究』附録、参照——七四一頁の一六、七四七頁の二二七及び八〇四頁の(3)、七五五頁の三〇四・三〇五、七五九頁の三三。

三三。

(13) 「男起行有餘力而撰^ス武一篇、不日而成、余見^ル之則五百餘歲之治乱^{アラハレ}一覽、數十時世之盛衰備于寸眸、其詞不俗其評不暗、可謂公論、可謂宏詞」云々(羅山文集卷一、二八六頁)

(14) 龜峰の言葉の一節にはかう見える。「譬猶以寡兵攻堅城。余精力盡於此而死。若卒成功。則官家之餘光也。」なほ、坂本太郎博士著『日本の修史と史學』——一五五頁、参照。

(15) 「元来春奇は諸侯との交際を好まず、羅山以来交誼ある家の他は、招かるゝことあるも往かざり

りしなり。……畢竟修史の業に全力を注ぎ、寸陰をも盡みし爲もあるべし。」(『国史館日録を讀む』——史学雜誌二九の四、一五——一六頁)。因みに、龜峰も羅山と折はして徳川幕府の御用学者としてきびしく批判され方であるが、坪井博士が本朝通鑑執筆の苦むにつぎ衆い同情をされたことは注目をひくところである(同上号、五一六頁、参照)。

(16) 白石羅山文集を讀んだと認められる徴証の一つは、写本「羅山覽永系図凡例」である(上掲拙著、七四一頁、参照)。